

学校現場における教育哲学の意義

林 泰 成

はじめに

私が、この特定課題研究「教員養成課程における教育哲学の位置づけに関する再検討」に取り組もうと考えたのは、非常に卑俗な理由からである。それは、勤務先の教員養成系大学において教育哲学系ポストの数が減っていく現状に危機感を覚えたからである。十四年前の着任時には、私以外に、二人の教育哲学者と一人の哲学者と一人の倫理学者がいたが、現在では、教育哲学のポストが一つあるのみである。少なくとも教員養成系大学においては、学校教育現場においても教育哲学が役立つということを示さなければ、そのポストはやがてゼロになるだろう。もちろん大学によって事情は異なるだろうが、全体的な傾向として教育哲学が軽視されているという事態は、多くの大学関係者が同意するであろう。

そうした問題意識のもとで私が取り組もうと考えた課題は、学校教育現場において教師たちが教育哲学の有用性をどのように考えているかということ、調査によって明らかにする

ことである。今回は、小学校一校、中学校一校の教師たちに予備調査を行った。その結果について、いくつかの項目を抜き出して報告する。

一 調査の概要

今回の調査は、次年度の本調査へ向けての予備調査である。一校の小学校と一校の中学校の教員全員にアンケートに答えていただいた。被調査者の数は合計で五十一名である。アンケート項目の確認のためにおこなったもので、数としては十分なものではない。しかし、不十分ながらも、学校現場にいる教員の意識の傾向性を確認することはできる。

調査に際しては、管理職に教員への配布を依頼した。また、教育哲学会の特定課題研究の一環であるということを公表した。そのことによってバイアスがかかっている可能性はある。

まず、「教育哲学とはどのようなものだと思いますか。当てはまる番号に○をつけてください（複数回答可）」という問いでは、選択肢より選んでもらったが、「教育全般に関す

る原理的な考え方」「人間の生き方」「人生観や世界観」などを選んだ者が多かった。また自らが学んだ教育哲学の内容を聞いたところ、やはりこの三項目が多かった。

「教職科目で学んだ教育哲学は、あなたが教育の仕事を進めるうえで役立っていると思いますか。あてはまる番号に○をつけてください」という問いでは、「役立っていると思う」が四人、「少しは役立っていると思う」が二十三人、「あまり役だっていないと思う」十九人、「役だっていないと思う」が五人であった。事前の予測では、役だっていないと答える者が多いと思っていたので、意外であった。

「教育哲学会という学会があります。参加してみたいと思いますか」という問いには、半数が、「機会があれば参加してみたい」を選択している。積極的な参加志望とは言えないまでも、教育哲学会という組織で何が議論されているのかに関心を持っている教員がいると判断できる。

教職科目において取り上げるべき学問領域を、選択肢の中から三つ選んでもらったが、生徒指導法、教育心理学、教科指導法の三つが多かった。教育哲学については、七名が選択したが、これはそう大きな数ではない。やはり実践的な方法にかかわる学問領域が選択されていると言える。

自由記述で意見を求めたところ、二名の記入があった。一

人目の内容は以下のとおりである。「即実践、現場に役立つ……となると、方法論（生徒指導や学級経営等）」となりますが、教師個々の教育信条や、何のためのかわりとなると哲学領域にかかわるものの、幹のゆらぎ度合いに、教師の日常が左右されると考えます。なくてよいものではなく、教育活動に関係したベース的存在だと考えます。そのベース的存在を現場教師も考えるべきだと思うが、なかなかそこまでは考えられないということになるのだろうか。また、もう一人の意見は、「教育哲学は、人間の根幹の部分で大切な学問だとは思ふ。しかし、哲学と聞くと、やはり固いイメージが先行してしまう。教育人間学などとして、学問が現場に近づこうとする取り組みも必要なのではないか」というものである。私たちが調査した際には、「教育哲学」という名称にこだわったわけではなく、教育哲学とみなされる内容が含まれているすべての科目を念頭に置いていたのだが、その真意が十分に伝わっていないかったのかもしれない。

全体的な傾向として、予想以上に、教育哲学に理解があるのではないかと思われる。しかしこの点は、先にも述べたようにバイアスがかかっているのではないかと疑ってかかる必要がある。本調査では、教育哲学に特化させずに教職課程全般の中で何が必要かを尋ねる形にしたい。また、教育哲学

の内容に関しては、「教育全般に関する原理的な考え方」の他に、「人間の生き方」や「人生観や世界観」についての学びが必要と考えているようである。この点については、その後のインフォーマルなインタビューによれば、若手教員と熟練者とで少し違った考えを持っているように感じられた。若手教員は、技術的なことを求める傾向が強いが、熟練者は、人生観や世界観を求める傾向があるように感じられた。この点は、今後、もっと被調査者の数を増やして確認する必要がある。

二 考察

教育哲学が生き残るためには、それが教育事象を分析する道具として役立つということを示さなければいけないと私は思ってきた。しかし、この予備調査から、意外と学校現場でも人生観・世界観としての哲学が必要だと思っている教員がいるのではないかと思われる。しかし、教員養成という視点で考えると、やはり教員を目指す学生が最初に求めるのは、教科の指導法や生徒指導法などのハウツーである。そうしたことを前提とすれば、教育事象を分析する道具として役立つということをまず示さなければ、人生観・世界観としての哲学を示すようなところまではとうていたどり着くことはでき

ない。

こうしたことは、教員養成系大学にとつてのみの問題だというわけではないように思われる。研究を中心とした大学でも、その大学院修了者全員がかならずしも研究系大学に就職するわけではないということを考えると、自らの専門を追求しながらもどこかで教育実践と切り結ばなければならないのではないか。

おわりに

私の所属する大学は、兵庫教育大学、鳴門教育大学、岡山大学と連合して博士課程のみの連合大学院を構成している。そこでは、教職大学院の開設に合わせて先端課題実践開発専攻という新しい専攻が作られた。その目標としてホームページには、「高度な専門性と実践力を持った教員養成を目指す教職大学院の実務家教員を含め、高度な資質能力を持つ研究者あるいは指導者を養成する」と掲載されている。つまり、教職大学院の教員になるような研究者の養成を目指している。教職大学院が、実務家教員から手ほどきを受けてスーパー教師になるための場所であるなら、それは大学院である必要はないのではないだろうか。学校現場でオンザジョブトレーニングを受ける方がよほど効率的だと言えるのではないだろ

うか。

教職大学院があえて大学院という組織形態を取るのは、そこに高度な専門性が求められると考えられているからだとは言えないだろうか。であれば、そうした組織の中に、教育哲学者の活躍の場を見いだすことも可能なのではないか。あるいは、そうした場で受け入れられる教育哲学を作り上げなければならぬのではないか。

（上越教育大学）